九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

仙台地元学の成立とその背景

森，千鶴子
九州大学大学院人間環境学府

https://doi.org/10.15017/1854049

出版情報：社会教育研究紀要. 1, pp.23-34, 2015-09-30. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

社会教育研究紀要 第1号　2015 23-34

研究ノート

仙台地元学の成立とその背景

森　　千鶴子※
Mori Chizuko

1　序論
「地元学とは何か」という問いに端を発して

1-1　水俣と仙台、ふたつの地元学

「地元学って何？」「それは学問体系なの？」「フィールドワークの一種？」筆者のもとに、様々な問いが寄せられている。「地元学」は今や日本全国どころか海外でも知られ、実践されているが、その全貌がわからない。それは、「地域づくり活動」「フィールドワークの手法」「社会教育における学習活動」など様々に解釈されており、すべて当てはまるともいえるが、そのことで地元学の定義がわかりにくくなっている。「地元学」という言葉は、多くの理念や概念、手法などを表し、多くの意味を含みこんで使われている。

この言葉を用いて、最初に地元学を提唱したとされる民俗研究家の結城登美雄は「地元学は地元の暮らしに寄り添う具体の学[1)]」であり、「その土地を生きた人々から学ぶことを第一義とする[2)]」とする。またその目的を「同じ地域を生きる人々ともう一度関係を再構築するためにそれぞれの地元の資源とそれを活かす知恵と技術と哲学を学ぶこと。そしてその力を合流させ自分たちの生きやすい場所に整え直すこと」だとする。

また一方で、結城とほぼ同時期に熊本県水俣市で地元学を提唱したとされる吉本哲郎[3)]は、「地元学とは、郷土史のようにただ調べて知るだけでなく、地元の人が主体になって、地元を客観的に、地域外の人の視点や助言を得ながら、地元のことを知り、地域の個性を自覚することを第一歩に、外から押し寄せる変化を受け止め、内からの地域の個性に照らし合わせ、自問自答しながら地域独自の生活（文化）を日常的に創りあげていく知的創造行為である。」[4)]と述べている。

結城が宮城県仙台市で地元学という言葉を用いて活動を展開しはじめたのは1991年、吉本は1995年であるが、80年代後半に二人は出会い、共に地元学の手法を模索していた時代がある。よって活動には共通点も多い。[5)]

「地元学」の理念を用いたフィールドワークの手法や調査法をいち早く体系化し（現在吉本はそれを吉本地元学と呼んでいる）、自治体職員の研修、地域づくりセミナー等を通じて全国に広めていった吉本に対し、結城は「地元学に決まった型はない。集まる人、関わる人、テーマによってやり方は変わる」[6)]と言い、自身の手法を体系化していない。[7)]

この違いから、地元学を吉本に学んだ人々は、吉本地元学の体系化されたフィールドワーク手法（「あるもの探し」）とその概念を「地元学」と理解しており、結城から地元学を学んだ人々は、「その土地を生きる人の声をきく」ことをベースにした我が町の見つめ直しに端を発する多種多様な活動を総じて「地元学」と理解している。

双方の成立過程にも差異があり、それぞれの地元学の概念に影響を与えている。吉本の地元学は、水俣

※九州大学大学院人間環境学府

病からの地域再生を背景とした行政主導のまちづくり活動からはじまった。一方で結城の地元学は、東北の中核都市、宮城県仙台市の公民館講座としてはじまっている。

地元学が現場に寄り添う具体の学であればあるほど、その形は時代や実施地区等によって変化していく。結城の地元学は、仙台市の都市部から、東北の農山漁村を舞台としたの食の地元学へと展開していくが、吉本の体系化された地元学も時代とともに変化している。そのことも「地元学」の概念をつかみにくくしている。

1-2　地元学研究の現在～ ESD 研究と水俣地元学との関わり

「地元学」は、教育学や社会学というような学問領域を示す言葉ではないが、その概念や手法は、1990年以降、全国の地方自治体の地域づくり、村おこし運動や、公民館講座での学習活動などで全国に広がった。[8)]

学術研究では、主に、持続可能な開発のための教育（以下 ESD）分野、社会教育分野において論説があり、地理学や、観光、ツーリズム研究（農村社会学、都市計画、経済学）等でも論文が見られる。

ESD 研究では、阿部治、小栗有子、大島順子が、地元学を取り上げている[9)]。阿部は、地域づくりの活動を通じて、地元学や地域学、内発的発展の視点からの地域からの学びと ESD とが関わり合っている[10)]。と述べる。ESD は、環境教育と深く関連していることから、水俣病からの地域再生をきっかけに、日本における環境教育の重要な場所ともなっている水俣で起こった地元学との接点があったといえるだろう。

ESD 研究者の中で、地元学について、最も多くの論文を執筆している小栗は、吉本とともに各地の地元学の現場に同行しながら、吉本哲郎の「水俣地元学」の形成過程に注目し、細密な検証を試みている。小栗は、吉本が「水俣地元学」を確立し、さらに自身の地元学を「吉本地元学」と名づけるに至った過程を、「地元学における当事者意識」に着目して描き出した。具体的には吉本地元学が、地元に生きる人々を当事者としてみなし、その当事者が経験してきたことを当事者の言葉として丁寧に拾い上げ、集められた情報（ないし知識）の意味を問い、そこに新たな意味づけ（ないし理論）を与える点に特性が認められる。と論じた。[11)]

一方で、結城登美雄が仙台で地元学を提唱した経緯については、結城自身の著書[12)] や、雑誌に寄稿した記事[13)] に小節があるものの、これまで他者によって細密に論じられ、分析されたことはない。また、結城は、「食の文化祭」に代表される食の地元学の功績により、2005年に「芸術選奨文部科学大臣賞（芸術振興部門）」を受賞したことで、氏の活動として、この食の地元学は注目されたが、初期地元学の成立過程や、仙台市内の地元学についての評価、論説は少ない。

1-3　地元学研究の現在～地域学と地元学

社会教育分野にも地元学研究はある。日本社会教育学会では2005年度から３年間をかけてプロジェクト研究「グローバル時代における〈ローカルな知〉の可能性―もうひとつの生涯学習を求めて―」が行われ、廣瀬隆人が、地域学・地元学研究を展開している。[14)] 廣瀬は、地元学と地域学の違いについて触れ、「『地域学』は、他と区別された一定の領域・空間を示す『地名』に『学』を付した『山形学』『薩摩学』『阿波学』『東北学』のような総称として用いられ、『地元学』は、地域学に比べて、対象とする領域がより日常生活に特化した『地元』に焦点が当てられる。」としている。さらに、地名＋「学」、地域学、地元学のいずれかを自称する135の「団体・組織」や事業の分析を行った上で、地域学と地元学を一括して地域学と位置づけ、その特長を「①自らの調査研究や学びを通じてその地に生きることのゆるぎない肯定感を獲得すること、②肯定感を獲得した上で、地域の課題や現実を学び、地域に暮らし、生きる『自分とは何か』を批判的にふりかえること、③地域の課題と自分の生活を問い直すことによって、自分が地域で生きる意

味を問い直し、地域を変えて行く主体となること」とした。

さらに廣瀬は、地域学の成立について触れ、「地元学も地域学も、1980年代後半～1990年代初頭のバブル景気に伴う地域開発ブームから、バブル崩壊による地方財政の圧迫により、地域が疲弊してしまい、「何もないまち」意識だけが残った現状に対する地域住民の抵抗として始まった。」[14] としている。

冠に地名を付した地域学と、地元学の差異については、稿を改めて検証することとするが、地域学の成立についてはひとつの論点を提示しておく。1990年の中教審答申「生涯学習の基盤整備について」の中で、地域における生涯学習推進の中心機関として、生涯学習推進センターの都道府県単位の設置が進められた。それに伴って90年代半ばから、全国に多くの生涯学習センターが建設され、そこを拠点として「山形学」等の地域学が展開されていったことにも注意を払う必要がある。

本稿では、上記のような問題意識から、地元学と地域学をひとまとめにして論じる前に、地元学そのものの成立過程を見ていく。具体的には、1991年に仙台市ではじまった地元学の成立過程と、その背景について考察する。主な資料は、結城登美雄と、結城が社長を務めていたタスデザイン室の元社員で、共に仙台地元学に関わっていた西大立目祥子氏をはじめ、80年代から結城と時代を共にした関係者へのインタビュー、タスデザイン室で制作した地域づくり関係のパンフレットや出版物、及び、仙台地元学の報告書、成果物として発刊された書籍、小冊子である。それらの資料を通じて、仙台市の地元学が描き出そうとしていた「地元」という世界は、いかなるものであったのかを明らかにしようとする。

2　仙台地元学前夜―「文化の時代」を背景に

2-1　地元学提唱者結城の生い立ち

仙台地元学における結城登美雄は、地元学の提唱者でもあり、指導者でもある。指導者は、その活動に少なからぬ影響を与える。そこで、結城が地元学をはじめるまでの半生をたどっておきたい。

結城は昭和20年満州生まれ。両親のふるさとは山形県大江町の山間部、田代村であった。そこから満州に向かい、終戦時には大変な苦労をして引き上げてきたという。

両親のふるさとの村で幼少期を過ごした結城だが、その後、挙家離村することとなる。「叔父が村会議長で、衆議一決町へおりることに決めたんだが、町に下りた時の悲しさを俺は忘れない」[15] と語っている。山形大学文学部の在学時には、この村のことを調べて社会学のレポートを書いたこともある。

父親は、仙台で生涯仕立屋を営んだ。体が小さく、虚弱であった結城を案じ、手に職をつけさせようと、中学を卒業した結城を新庄の農水省農村工業指導所へ入所させた。ホームスパンの手織り職人養成コースだった。

１年を過ごすが高校進学の夢を捨てきれず指導所を飛び出し、その後仙台二高へ。大学在籍も長かったため、1945年生まれの結城は、1960年代後半、全共闘時代の学生運動に遭遇してしまう。「貧乏学生でアルバイトをかけ持ちし、土木工事から徹夜のせんべい焼までなんでもして、昼飯抜きで、文庫本を買っていた。ラグビーもしていた。」[16] という。しかし４年生の時、バリケードを築き、ストライキをやっていた仲間達は就職のためにあっさりと学生運動をやめて試験を受けていく。当時の様子を結城は「やりきれずに、一ヶ月で一升瓶を六本空けて、１年くらい失語症だった」[17] と、語っている。

大学卒業後、仙台の広告会社に就職、１社目を２年で辞め、２社目の広告会社に入社すると、いきなり営業部長に抜擢された。

この頃結城は、離村した大江町の家屋の権利を叔父から譲り受けている。「冬場になるとね、そろそろ来ないとつぶれるぞーって電話くるわけ。そこで、俺は雪下ろしに行く。すいません、３日間くらい会社休みます。っていなくなって、バス停から４時間かかって歩いて、ひとりで下ろす。遭難しかかったことも

何度もありますよ」

平成16年、結城は、叔父の佐竹与惣治が退職後こつこつとしたためてきた田代村の記録を一冊の本に編纂し、古稀の記念に印刷、出版している。パソコンで文字を打ち、レイアウトした冊子で、A４判100ページにわたる作である。タイトルは「おらだの村―山の記憶、人の記憶田代」その内容は、かつてここに村があったという序の言葉に続いて、村を守ってくれた神々、村の生業、日々の暮らし、村の一年、ことわざ、言い伝え、思い出のあれこれ、年表、風景と、叔父が丹念に書き留めたふるさとの記録である。

2-2　結城と「文学」、「演劇」

営業部長時代、結城は劇団黒テント[18]から、仙台公演への協力依頼を受ける。結城は４歳になる長男の手をひいて一人で必死に券を売り、電柱にポスターを貼って歩いた。そして、生まれてはじめて芝居を見た。あまりの感動に自身の人生を問い直し、31歳にして会社を辞めてしまった。1976年のことである。[19]

その後結城は、井上良雄[20]に心酔し、著書を読んでは原稿を書く日々を続けていた。結城は会社を辞める直前に、自宅近くの黒松教会の立看板に井上良雄の名を見つけ、東京神学大から説教をしに来た井上の話を聞いている。井上に手紙を書いた結城に応えて、２DKのアパートに井上が訪ねて来たこともあるという。

「あれほどドイツ語のできる井上さんが、神学校で初歩のアーベーツェーを教えている。５人、10人の信徒のためにガリ版で原稿を書く。オレたちって、「朝日新聞」に出るとすごいとかどうしてもあるじゃない。井上さんはどんな小さなメディアにも、どんなふつうの町のふつうの人に接するときも手を抜かない、そういう生き方のすごさみたいなものを教わりました」[21]と結城は言う。現在は、全国から地域づくりの助言者として招聘され、数多くの講演もこなしている結城だが、常々言うことがある。「広いホールに300人、500人の聴衆を集めて、町づくりの講演会をしたところで、地域は変わらない。集落の公民館に10人でもいい。本当に困っている人、我が集落を少しでもよくしたいと思っている人に話をしたいんだ」と言っている。

筆者は2000年から結城に地元学の手法を学ぶとともに、氏の村歩きの現場や、地域づくりの現場に同行してきたが、2008年頃、結城がこんなことを言った。「今、農村には文学が必要なんだ。浪速節と言われようがかまわない。皆が感銘し、心をひとつにして、行動に駆り立てるような文学が…。」

初期の仙台地元学は、我がまちを「歩く、見る、聞く」して調べた成果を冊子にして表現していく。結城は、77年に設立した広告会社「タスデザイン室」で、その冊子づくりの助言、及び編集・デザインを行っていくのだが「わがまち発の冊子」に、結城は人の心を揺さぶり、行動へと駆り立てる文学性（ものがたり性）を求めたのではないかとも思える。

地元学の指導者としての結城登美雄を、氏の生い立ちの中に見てきた。終戦の年に生まれ、戦後復興の混乱期に東北の山村で幼少期を過ごした。都市への一局集中と、地方の過疎化が進行する中で、結城の家族は挙家離村し、仙台へ出て行く。そして十代のはじめには職人であった父のすすめで東北の手仕事を学んだ。（結城は後に地域振興の仕事として、東北各地の農村の副業づくりとして手仕事を進めていく）そうして、学生運動、文学、演劇などを、東北の中核都市、仙台で経験し、日本の高度経済成長とともに成長産業となりつつあった広告業に70年代に関わっていった。

当研究では「地元学」を、ひとつの社会教育実践として見ていこうとしているが、その指導者である結城登美雄は、教育者でも、研究者でも社会教育関係者でもない民間人であり、いわば「在野」の存在であった。[22]そして自身の地域づくり実践の経験から、数々の地方自治体や公民館のアドバイザー等を務め、また大学の非常勤講師などを多数兼務してきた。結城自身は「在野」で有り続け、そのことにむしろこだわりを見せている。そして、仙台の地元学は、これまで見てきた結城の生い立ちはもちろんのこと、在野で

あること、言い換えれば、広告会社の経営者（職としては、コピーライター、プランナー）の結城が、市民とともに展開した活動であるというところに、ひとつの特長がある。

2-3 「地方の時代」、「文化の時代」の中で

２社の広告会社勤務を経て、結城は、1977年（昭和52年）に、広告制作会社「タスデザイン室」を設立する。1977年は、第三次全国総合開発計画（三全総）が策定された年である。田中角栄の日本列島改造論にわいた70年代初頭から、オイルショックを経て景気は低迷し、地方圏から大都市圏への人口移動が一時的に沈静化した。三全総では、「人間居住の総合的環境」を整備することを開発の柱とする「定住圏構想」が提起され、福田内閣の後継の大平内閣は、「田園都市構想」を掲げ、「地方の時代」の到来ともいわれた。各地で、町おこし、村おこし運動が活発化した頃である。

タスデザイン室は、仙台市内では、広告制作プロダクションの先駆けであったこともあり、大手広告代理店からも次々に仕事が舞い込んだ。東北の中核都市として発展していく仙台で、結城の会社は、80年代になる頃は、仙台の大手企業の広告を一手に引き受ける会社に成長していた。

当時、２度のオイルショックによって、高度経済成長は終焉を迎え、人々の関心は、「カネ」と「モノ」から、「ココロ」へ移り変わろうとしていた[23]。国民全体の生活水準は上がったが、その一方で、東京を中央とする一局集中が生まれ、日本全土的に地域間格差は広がっていた。また、地方都市では、激しい国土開発による環境の悪化や公害問題も発生し、地方自治体は対応に迫られていた。これらの背景から、住民の豊かな生活を維持していくために、地方自治体は、地方分権や、新たな発想で地域特性を掘り起こすことによる地域の個性化、主体性の確保などを模索し、中央集権に対抗する動きとして、地方自治体の首長などから「地方の時代」[24] が提唱され、各方面に大きな反響を呼んだ。

このような流れの中で、78年に発足した大平内閣は、経済成長に変わるキーワードとして「文化」を掲げた。施政方針演説において「文化の時代の到来」[25] を告げ、その意味について、79年に発足させた私的諮問機関「大平総理の政策研究会」の発足趣旨の中で詳しく語っている。「戦後30余年、経済的豊かさを求めて脇目もふらずまい進し顕著な成果を収めてきた」ことは、「欧米諸国を手本として進めてきた近代化、工業化の偉大な精華でもある」。が、それを教授した国民の意識には、重要な変化が見られる。「国民は、人間の内面に深く根ざした精神的、物質的な豊かさ、生活の質と多様性＜中略＞人間と人口と自然との調査のとれた共存を求め始めている」とし、「近代化の時代から近代を越える時代に、経済中心の時代から文化重視の時代に至った」と述べた。[26]

タスデザイン室は、この頃、仙台市からスパイクタイヤ粉じん問題解決のためのキャンペーンの仕事を請け負った。この仕事は12年続き、「役所の担当者が替わったから、詳しくは結城さんに聞いてくれ」といわれるようになった。この仕事をきっかけに、結城は仙台市や宮城県内の地域行政の仕事に踏み込んでいく。85年には気仙沼市の依頼で「全国水産地域シンポジウム気仙沼」をプロデュースした。[27]

当初は、気仙沼市内だけの小さなシンポジウムの予定だったが、結城は東北の沿岸をはじめとする日本の漁業の現状を多面的に調査し、「漁業の問題は気仙沼だけの問題ではない」と、全国規模の漁業シンポジウムとして企画する。広告営業の経験を活かし、催しが大きくなった分膨らんだ予算は、スポンサーを募ってまかなった。分科会の企画、印刷物、資料の制作を一手に請け負い、基調講演は、作家の開高健に直談判して出演をとりつけた。３日間の開催でパネラーが54人、参加者は1800人であった。パネラーには、漁業関係者や専門家だけではなく、地域づくりの専門家も名を連ねていた。その中には当時地域主義運動を展開していた清成忠男、日本の流通マーケティングのフロンティアといわれ、西武百貨店を拠点に「日本の101村展」[28] を仕掛けていた今井俊博らもいた。

清成、今井は、水俣市の吉本哲郎とも親交があり、当時水俣市の職員だった吉本とともに、水俣の再生

にも関わっていた。今井と共にこのシンポジウムに参加していた沢畑亨（現水俣市久木野ふるさとセンター愛林館館長）は、「今井さんが、結城さんと吉本さんを引き合わせ、ふたりの情報交換がはじまった」と語っている。

「オレは広告屋だから、ほらも吹いたけど金も集めた。」と語る結城だが、「何よりうれしかったのは、今まで出会うことのなかったたくさんの漁民と知り合いになり、ありがとうと感謝されたことだね。ああ、広告で学んだことが、地域をよくするほうにもやれるんだなあ。海の男たちの役に立つんだなあと思った」と言っている。

この仕事から、結城は広告業のノウハウを用いながら、町おこしに舵を切っていく。82年に入社、元タスデザイン室の社員であるフリー編集者の西大立目祥子は、結城と共に行政の仕事をしてきたひとりである。「社員が五人になり、十人になりして、会社も大きくなっていったのですが、仙台市の仕事をするようになってからは、従来の企業の広告の仕事をしながら、それに加えて、地域貢献の仕事や、農村漁村の現場になんども足を運んで調査等を行う仕事が増えました」と西大立目は言う。

西大立目が「私にとってもひとつの節目だった」と語るのが、気仙沼のシンポジウムが縁ではじまった唐桑町の仕事である。唐桑町は気仙沼の隣、宮城県最北の三陸海岸沿いにある漁村である。この漁村の町づくりに関わっていた建築家の石山修武と、劇団黒テントと組んでの町おこしが「唐桑臨海劇場」であった。結城、石山が漁村の聞き取りをしている時に見つけた鰹節工場の廃屋を使って何か地域の活性化ができないかという話が持ち上がり、劇場にしようということになった。漁村の人々と皆で竹切り、櫓を組んで工場を覆った。かつて遠洋漁業の船乗りだったという家の大漁旗を集めてきた。地元の女性たちと、何百枚という大漁旗を縫い合わせて、大漁旗劇場をつくった。ここで、郷土芸能や演劇を年に３日間、６年間続けた。

メインの舞台は、東京から来た黒テントの劇団員を助言者に村の青年達とで作る「取材劇」だ。地元の家々を回って、その家々の話を聞き、この土地をどのようにして生きてきたか、その家の歴史や喜怒哀楽を舞台の演目に仕上げ、若者達が村人の役を演じて公演する。

村の生活史劇を600人の村人が集まって観劇し、「あれは、どこの家の話だ」と大笑いする。しかしラストシーンの「どや節（大漁唄い込みの原型のような唄）」を合唱する頃には、我が村の物語に600人全員が涙を流したのだという。

「土地の力、人の力、そこで生きてきた人の心だよね。小さな何でもないようなものでも、それが集まって地域というものが成り立っている。一つ一つの大漁旗が集まってできあがった村の物語を見て、始まりにはいつも家族の、私たち個人の営みがあったのだということに気づくんだよ」と結城は言う。

1989年、結城は、村の若者たちと一口５万円の出資を募り、「株式会社唐桑まちづくりカンパニー」を立ち上げた。

その事業の中で、タスデザイン室は、唐桑の魚を都会の消費者に届ける「唐桑おさかな倶楽部」を企画した。「冷蔵車を買って…。唐桑の人が配達できないときは、私たち社員も魚を配達したんですよ」と西大立目は言う。

広告業を通じて、地域づくりに関わり、経済の仕組みづくりにまで踏み込んでいく。その土台には、村を歩き、そこに生きる人々の話を聞き、土地の暮らしを徹底的に調べていくという結城の手法があった。

３　仙台地元学の成立

3-1　仙台の開発の中で生まれた地元学

1988年、89年、唐桑の仕事と同時並行で動いていたのが、仙台市生出公民館の「新しいふる里づくり講

座」と、仙台市七郷市民センター『ふるさと七郷探訪講座』のふたつの仕事である。

生出（おいで）公民館の講座は、1985年にスタートした。地勢、植物、動物、郷土史などを調査、聞き取りして、記録するとりくみである。当初はまちおこしのためのイベントづくりからはじまったが、その後、「町おこし学」と名づけられた聞き取り調査に変わった。結城は講師に招かれたことをきっかけに、報告書の編集協力者としてかかわり、受講生の聞き取りを冊子に編集、デザインする仕事を会社で請け負った。A五判の小冊子のタイトルは「もうひとつの仙台、おいで」である。これが、仙台地元学のさきがけと言われている。

『ふるさと七郷探訪講座』には、社員５名とともに、より深く関わった。市民センターを拠点に七郷地区を歩き、聞き取り、資料を集め、編集会議を重ねての３年半の講座に、結城らは、助言者として、ほぼ手弁当で通い続ける。

七郷地区は仙台市東部に広がる田園地帯である。講座は七郷の今昔を記録しようという主旨ではじまっていたが、依頼を受けてはじめて七郷を訪れた時に見た風景について、結城は「手遅れに写った」と言っている。激しい都市開発の中で、市内の山はどんどん切り崩されていた。そして次に手をつけられたのは減反、米価低迷、後継者不足に見舞われていた田んぼである。「七郷の人々はそこから抜け出すための手段として区画整理事業による宅地化を選び取った。」[29)]

その結果、美しい田園風景はバイパスで分断され、絶え間なく重機が行き交い、日々姿を変えていく。結城は「まだ私たちが丈夫でいるうちに、七郷が七郷であった時代と現在を記録して残したいという老農たちの言葉に従って、この土地で地元学をはじめた」[30)] と書いているが、その思いを強く持っていたのは、七郷の人々ばかりではない。開発へのささやかな抵抗として、この土地に生きた人々の生活の記録を残しておきたいという思いを強くしていったのは、結城自身ではなかったか。

七郷の地元学について、結城が何度も語って聞かせる出来事がある。「オラんとこは何にもねぇと、話の弾まなかったお年寄り達が、農作業の話だけはよくしゃべる。それならばと、昭和37年頃の圃場整備前の航空地図をトレースして、畳二枚の大きさに拡大したものを広げたんだ。そしたら、この三角の田はうちのじいさんのもの。この田はこんなに小さくても四俵はとれたと、ひとつひとつの田の形をみんなが覚えてて、そこでの汗と、苦労と、祭り、家族の思い出の話が絶えない。昔のことを語る生き生きしたじいちゃん達の様子が忘れられない。それからお年寄りたちは生き生きと、村の暮らしを何でも話すようになったんだ」。七郷の歴史は、人々が土地に刻んだ歴史だと結城は言う。そして人々は土地とともに自らの生活を記憶しているということを、結城は七郷の人々から学んだのだろう。

さらにこの頃、結城は市の委託を受け、民俗学者の香月洋一郎とともに「仙台の歴史的景観保全計画」を提言する調査事業を行っていた。仙台を東西南北に分けて黒い建物（木造家屋）をすべて洗い出した。奥州街道の記録写真は数万枚撮った。職業電話帳で企業の変遷を調べたり、ゴミ収集車に同乗もしたという。「あのころの街の様子はひどかったね。バブルで地上げがどんどん進んで、朝あった建物がもうないということもたびたびあった。」[31)]

1988年～90年にかけて、結城は広告業者として関われる町づくりを試行しながら、激しい都市開発で変わりゆく仙台の街と対峙していた。そうして我が地元と関わる手法を模索し、編み出していったのではないか。

3-2　人と人とをつなぐ「宮城野区地元学講座」

仙台はショートステイ型都市だと結城は言う。伊達六二万石の城下町が戊辰戦争によって解体され、その後第２師団をはじめとする数多くの兵営が置かれた。戦後、軍の後は学校と役所になった。軍隊町、学校町、役人町。入隊、除隊、入学、卒業、異動と転勤。昭和40年代の調査では、10年以上の居住者はわず

か13.5％だった。さらに、軍隊、学校、役所の町は自ずから公的色彩が濃くなり、経済も公的依存になりやすいと結城は見る。またつねに東京的なものを価値の基準と仰ぎ、コンプレックスを抱えてきた側面もあるという。

89年、仙台市は周辺の市町村を合併して政令指定都市となり、５つの区としてスタートした。そして91年、結城のもとへ、町づくり推進課の懇意にしている職員が、地域づくり事業の相談に来る。折しも竹下内閣が、各地に１億円のふるさと創生資金を交付していた頃。その資金で「宮城野区民ふるさと創生事業」をはじめるべく、委員会を立ち上げたいとの相談だった。この事業で５つの区の区民意識を醸成するための町おこし事業だという。

合併の是非が、その直前まで問われ、泉区では住民投票の寸前までいったのはつい最近のことである。当時の区役所担当者は語る。「『まだほとぼりもさめねーのに、区民意識って、おまえんとこの上司、ばかでねーのか？』と結城さんに言われました。だから、わかんなくて結城さんとこ来たんだって言い返しましたが」と。「５年、10年しか住んでないやつらがよってたかって、何が区民意識だ、町づくりだ。杜の都なんて言っても足下のことわかってない。そういうのを表層都市っていうんだ。そんなとこの町づくりなんてやらない」と結城は事業への協力を断ろうとしたのだという。

仙台は支店都市とも言われていた。ショートステイ型都市の住民の居住歴は長くて４年、５年。10年いたら古株です。そして古株の住民は今何をしているかというと、不動産業が多い。下宿、貸し家、マンション・アパート経営。工業化を経ずにここまで大きくなった都市は少ない。仙台は工業化ができなくて、通過型の人々におもねりながら大きくなった。

「そうすると、長くつきあう感覚が乏しいわけ。どうせいなくなる人だからと、旧住民と新住民の刹那的なつきあいになる。賃貸アパートの住民はゴミの出し方一つも面倒くさい。大家は文句を言わない。金で解決するんだよ」

区民意識の前に、自分の足下を見つめ直し、自分たちで住みよくする。「そのために一緒に何かやろう」と言える活動をおこそう。結城は地元学講座を宮城野区全域で13箇所で開講しようと提案する。

そうして初めて「地元学」という言葉を用いて開講した「地元学講座」は、市民センター、公民館、社会学級、仙台氏歴史民俗資料館などが連携して90年にはじまった。結城の助言指導のもと、受講者自ら、我がまちを歩く、見る、（人の話を）聞く、記録するという活動をはじめたのである。

講座の説明資料には、受講生に向けて以下のように解説されている。

「地元学講座とは、自分の住む地域の特色を探り、愛着を深めるために、受講者自身が、そこで暮らす人達から地域の歴史、自然、生活などを調査取材し、報告書にまとめる講座であります。調査取材する中で、そこで暮らす人達の思いに触れたり、まとめた報告書を通して人と人、人と町とのあたらしい出会いが生まれ、地域コミュニティ活動の活性化とこれからの町づくりのきっかけとなることを目指しています。」

宮城野区の地元学講座がこれまでの郷土学習、郷土史研究と異なるのは、報告書＝冊子づくりを通して、人と人とを結びつけ、希薄だった地域コミュニティ活動を活性化させることを目的としてはじまっている点である。そしてその土台には、戦前から郷土史研究が活発に行われてきたこともあった。前述した生出地区、七郷地区でもかわりゆく郷土の姿を記録し、残す取り組みがあった。

結城は、調べた成果としての報告書を、我が街の小冊子として発行することにこだわった。宮城野区地元学にはじまる初期の仙台地元学では13冊。その後10年余りで、40冊もの「地元（学）冊子」ができた。それらは受講生自らが書き、販売した。わずか100m ほどの小さな通りしかない300世帯のまちで、冊子は3000部売れ、さらにアメリカからも注文が入った。「１度は過ごした我が町の本がほしい」と、市外からも多く要望が寄せられたのだという。

「人のつながりというのは距離や時間を越えるのだなと思いました。地元を懐かしいと思い、そのことを

語り合う場として必要とされる、対話を繰り返すものとしてのメディアをつくることが私の初期段階の地元学なのです」[32)]

冊子づくりには、タスデザイン室も協力したが、内容はあくまでも受講生がまとめることとし、表紙のデザインやレイアウトを担当した。西大立目は、当時制作した冊子を見ながら「このＡ５判中綴じの気軽さ、一色印刷の暖かみが、我が地元の冊子なのだという愛着を抱かせる。受講生にも好評でした。昨今よくあるツルツルの上等な紙で、４色印刷された立派な冊子とは違うアナログ感。内容も、過度の再構成や編集はせず、受講生が調べたことをランダムにそのまま載せる。文化財も町の面白い看板も等価値に載せてある。有名なもの、テレビで取りあげられたものという価値観でもなく、調べた個人の視点が活かされているのです」

宮城野区地元学講座の実際とその成果については、稿を改め、ここでは詳しい分析をしないが、初期の仙台地元学では、受講生が、ともに歩き、見て、聞いて、地元を知り、皆で地元の物語を創造しながら、発見したこと、考えたことを外に向けて発信した。その結果、人と人とがつながり、地域を住みよくする行動を起こすことにつながった。宮城野区の活動は、仙台全域に広がり、今も様々な活動の種となって受け継がれている。

４　まとめ　仙台地元学が描き出す世界

「地元学」という言葉を生み出した仙台市の地元学の成立までを、インタビューや資料を通じ、提唱者の結城の活動や、当時の時代、文化などの背景とともに見てきた。町おこし、村おこし運動が活発化した70年代後半に、結城は広告業者として地域作りや、地域の文化活動にかかわりはじめ、バブル景気の80年代後半、激しい都市開発のただ中にあった仙台の日々変わりゆく風景の中で、住民が自ら歩いて調べる「地元学」を通じて、「もう一度、我が地元を見つめ直そう」と仙台の人々に働きかけた。

ともに調べる活動を通じて人と人とを結び、そのつながりを維持するために、地元という生活圏を表す「地元（学）冊子」というメディアを作り続けた。

この地元（学）冊子で、結城は仙台の人々とともに、何を描き出そうとしていたのか？

結城は地元学の「地元」という言葉がどのような範囲を表すかという問いに対して、「仙台では『おらほ』が地元」と答えている。「おらほ」は日本がたくさんの村でできていた時代でいう大字にあたるという。村は大字の力をもちよることによって、いろんな困難を乗り越えてきた。祭り、結い、講などの人のつながりがあった。おらほ、は「その人にとっての生きる世界」。なのだ。

「僕が地元学という言葉を20年以上前に使いはじめた理由は、当時の地域づくり・まちづくりを進めようとしていた人達の『地域』が、実際の地域とは距離を置いたものだったからなんだ。そして地元のじいちゃんばあちゃんたちに、「おらほの地元では、なかなかそういうわけにはいかんのだ」とか、「おらほの地元ではこういうもんだ」と言われ続け、「おらほの地元」がいつも頭の中を占めるようになったから（中略）人の力、そこに暮らす人達の力が大切だ、大事だと思う力が集まってくると変わるぞ、それが地元学だぞということだったんですよ」[33)]

1995年に、仙台市宮城野区役所が発行した「地元学マニュアル」は、Ａ５版の小冊子である。現在は「決まったフィールドワークの手法を持たない」と、結城は言っているが、この冊子には、初期の仙台地元学の考え方、目的やフィールドワークの手法、そして調べたことの活かし方までが、簡潔にわかりやすく述べられている。

その冒頭の文章はマニュアルらしからぬ体裁で、人々を「自分のまちのものがたり」にいざなう。それ

は「詩」であり、ストーリー性のある「コピー」でもある。ここに、結城が青年期に追求してきた文学と、広告業で培ったノウハウが融合した表現を見る。

自分のまちがおもしろい。

毎日過ごしているじぶんのまちなのに、たとえば20年前どんなところだったかを、知らない。
近所の人とゆっくりおしゃべりしたことが、ない
みんな、少し忙し過ぎるからなのかな
でも、この頃、新しいものより古いもの、
遠くのことより身近なことが、大切に思えてきた
このまちのことをもっと知りたいと思う
知っている人に話を聞きたいと思う。
まずあるいてみよう
思いきって、昔を知るあの人に声をかけてみよう。
いっしょに歩く仲間をみつけよう
そうすれば、きっとこのまちが好きになるはずだ。
もっといいまちにしようと思うはずだ。
「地元学」は、自分の暮らすまちのものがたりを探すこと。
そして、まちの新しいものがたりを、みんなでつくり上げること。
(強調部分ママ)
『地元学マニュアル』(仙台市宮城野区役所 1995)

結城が、地元学を通じて、おらほの人々と共に描きたかったのは、対中央というモノサシでその価値や個性を決める「地域」ではなく、皆で力を合わせておらほの暮らしを守る、自律した世界ではなかったか。中央発のものの見方によらない「おらほの生きる世界」を、「地元学冊子」などの小さなメディアや、唐桑臨海劇場のような「市民取材劇」といった文化活動で表舞台にひっぱり出すことで、「これから、今、ここでいかに生きるか」を自ら考え、おらほの視点で地域をつくる市民像を描き出し、育成しようとしてきたのではないだろうか。

以降の研究では、結城、吉本の二人の提唱者を「学習支援者」という視点でとらえ、地元学において住民の中に学習支援者が育成される仕組みに注目していく。

地元学において、住民に最初に働きかける第一の学習支援者（例えば結城、吉本）と地域住民が学習活動を行っていく中で、住民の中に第二、第三の学習支援者が生まれる仕組みに注目し、この双方の支援者の関係の中に、社会教育における新しい専門職像を見ようとしている。

ここで言う専門職とは、住民と切り離された専門職ではなく、住民の中から生まれる新たな学習支援者との関係性の中で成立する。

住民主体のまちづくりは、住民の中に新たな学習支援者が増え続けることによって推進され、継続されていく。その仕組みを見ていくことによって、社会教育における「新しい専門職像」を描き出していければと考えている。

【注】

1）結城登美雄『地元学からの出発』（農文協、2009、p13）
2）同（p27）
3）1947年生、地元学ネットワーク主宰。元水俣市役所職員
4）吉本哲郎『風に聞け、土に着け【風と土の地元学】』（三重県自治会館組合三重ふるさと学資料、2000、p8）
5）水俣市久木野ふるさとセンター愛林館館長、沢畑亨氏へのインタビュー（2013.12.1）
6）結城登美雄氏へのインタビュー（2013.12.26、於仙台市）
7）実際にフィールドワークに限って見ても、住民が我が町を歩いて調査するという吉本と同様の方法の他に、食をテーマとする家庭料理の一品持ち寄りを通じた活動も「食の地元学」と呼んでいる。
8）地元学を表題に記した一般書籍（書店流通をしているもの）として最も早いものは、1995年、吉本哲郎著の『私の地元学～水俣からの発信』である。その後、農業の専門誌である現代農業の増刊号で『地域から変わる日本～地元学とは何か』（農文協）が2001年、その後は2007年、同じく農文協刊の雑誌『農村文化運動』が、「地元学、地域学の現在」という特集を組んでいる。
9）阿部治他「持続可能な「地域づくり」「人づくり」に向けて―「国連・持続可能な開発のための教育（ESD）の10年」の総合的中間報告」（農村文化運動、No.182、農文協 2006）
10）阿部治「持続可能な開発のための教育（ESD）の現状と課題」（環境教育　vol.19- 2、日本環境教育学会 2009）
11）小栗有子「「当事者主権」としての地元学序論―吉本地元学の進化 の意味をもとめて」（鹿児島大学生涯学習教育研究センター年報、2012）
12）結城登美雄『地元学からの出発』（農文協、2009）
13）結城登美雄「わが地元学―その土地を生きた当時者に学ぶ」（現代農業2001年５月増刊号『地域から変わる日本―地元学とは何か』、農文協、2001）
14）廣瀬隆人「ローカルな知としての地域学」（日本の社会教育52集、日本社会教育学会、2008年、p39-49）
15）森まゆみ「町おこし商売はやめにしました」（『品格なくして地域なし』、晶文社、1996）
16）同 220p
17）同 220p
18）東京を拠点とする劇団。唐十郎の「状況劇場」、寺山修司の「天井桟敷」らとともに、60年代後半～70年代前半のアングラ演劇ブームを代表する存在であった。黒いテントで旅公演を行う劇団であったため「黒テント」の名が付いた。
19）この若かりし頃の黒テントとの出会いは、後に気仙沼市の海辺の町「唐桑」での町づくりにつながっていくこととなる。
20）明治40年９月25日生まれ。昭和５年「宿命と文学に就いて」、７年「芥川竜之介と志賀直哉」などを発表。13年仲町貞子と結婚。一時マルキシズムに傾斜したが、のちキリスト教神学者への道をあゆみ、戦後は東京神学大教授をつとめた。
21）森まゆみ『町おこし商売はやめにしました』（『品格なくして地域なし』、晶文社、1996）
22）結城と並び、地元学を提唱した水俣市の吉本哲郎は、かつて水俣市役所勤務の行政職員であった。
23）内閣府（当時は総理府）が毎年実施している「国民生活に関する世論調査」では、オイルショック直後の1979年を境に、「物の豊かさ」よりも「ココロの豊かさ」が重要だとする回答が上回った。
24）神奈川県知事であった長洲一二が、1978年に提唱して、一躍流行語になり、地方自治体関係者にとっての一種の聖句として定着した。地方の時代につながる動きには、1976年にはじまる「地域主義」運動があり、この運動をすすめた清成忠男は、水俣地元学の吉本哲郎と親交があった。
25）「文化の時代」は、大平総理の政策研究会「文化の時代の政策研究グループ」が1980年にとりまとめた報告『文化の時代』以降、政策スローガンとして使われるようになった。同報告は、世間一般にこの標語を知らしめ、その後の国や自治体の文化行政の展開に、理念の面で少なからぬ影響を与えた。
26）大平総理の政策研究会「文化の時代研究グループ」の第一回会合における大平総理発言要旨。「政策研究会」は次の９つの研究グループの総合体として、1979年１月から次々と発足した。１文化の時代研究グループ、２田園都市構想研究グループ、３家庭基盤充実研究グループ、４環太平洋連帯研究グループ、５総合安全保障研究グループ、６対外経済政策研究グループ、７文化の時代の経済運営研究グループ、８科学技術の史的発展研究グループ、９多元化社会の生活関心研究グループ
27）70年代後半から80年代にかけては、町おこしをテーマとしたシンポジウムが多数開催され、それらの企画が広告業者やコンサルタントに外部委託されることも多かった。
28）『日本の101村展 ’85 報告書』（西部百貨店）によると、この催しは、全国各地で展開される『まちづくり』『むらおこし』『一村一品運動』を都市に紹介する試みで、101村展の『101』とは、“多くの市町村の結集”という意。西武百貨店池袋店は、当時、単体としては日本一の売り上げ、入店客数といわれ、特別催事場で行われた『日本101村展』は700坪の展示面積と１週間に及ぶ開催期間で、入場者数は40万人を超えた。
29）結城登美雄「わが地元学―その土地を生きた当時者に学ぶ」（現代農業2001年５月増刊号『地域から変わる日本―地元学とは何か』、農文協、2001、P18）
30）同、上掲

31）結城登美雄へのインタビュー（2013年12月）より。
32）『「地元学から学ぶ」講演会記録集』p8（立教大学 ESD 研究センター、2010）
33）『インタビュー・よい地域の条件とは』（『月刊公民館』2012.12月号、公益社団法人全国公民館連合会）